

朝鮮平壤市の都市形成に関する研究

—その1 高句麗時代の平壤—

正会員 ○李 明*

朝鮮 平壤 高句麗時期
大城山城 安鶴宮 平壤城

1. はじめに

本研究は、社会主義国家として維持している朝鮮民主主義共和国の首都である平壤市に着目して、その都心形成を中心に都市形成における計画思想について故金日成主席の教示も吟味しながら分析考察しようとするものである。研究方法としては、朝鮮における大学建築学科使用教材や学位論文、『金日成撰集』などの資料に対する分析を通じて考察する。筆者は2007年8月、朝鮮に留学した友人らから朝鮮建築に関する教材や論文資料を多数入手した。それらの資料を読む過程で平壤市の都心形成が社会主義という国家的計画思想が滲んでいることを深く感じさせられた。それをきっかけに平壤市の都市形成に関する資料の調査を行い、私的な資料を含め多量な資料が入手できた。平壤市の都市形成史は主に、戦前期、戦後期と2つに大別できる。本稿では本研究の一端として、戦前平壤市の起源と変遷過程をまとめて提示する。平壤都心部の形成史は、朝鮮半島の建築史の研究において重要な意味を持つだけでなく、社会主義国家朝鮮における都市形成を考える上でも興味深い課題である。

朝鮮半島の戦前の歴史は、主に①高句麗時期、②百濟時期、③新羅時期、④李朝時期、⑤日本統治期に分けられるが、平壤市の都市形成と深く関係するのは、①、③、④、⑤である。その中③の新羅時期には平壤市はほとんど建設がなかったと言われている。本稿では、高句麗時代の平壤の形成史について考察を試みる。

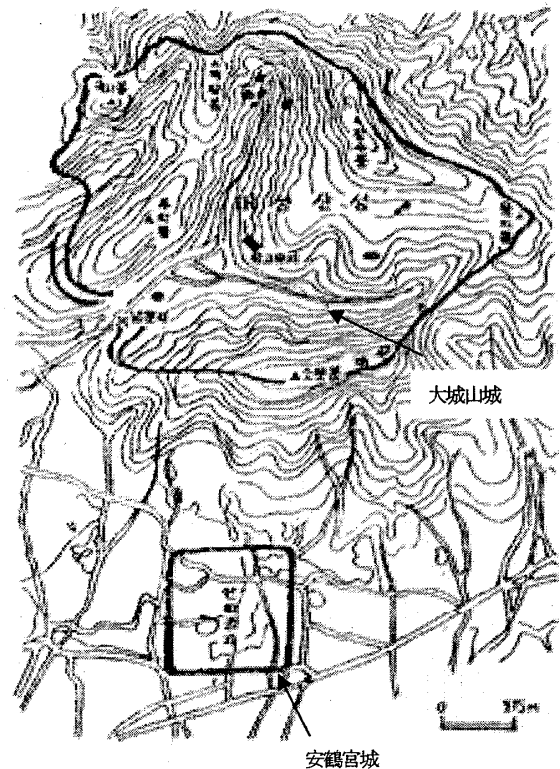
2. 高句麗時代の平壤

平壤は427年からほぼ250年間に渡って高句麗の首都として機能したとされる¹⁾。平壤が高句麗の首都になった初期には、安鶴宮を中心とした大城一帯が首都であった。安鶴宮の北側には大城山城、東南側と西南側には古墳山城、青岩里土城があり、この3つの城によって都市が囲まれていた。大城山城の小文峰南側に安鶴宮が建てられているが、大城山城と直接繋がっていた。宮殿の南側と東西両側に都市が広がっていたと見られる(図1)。大城山城は敵から隠れやすく、長期戦ができる絶好の場所だったのである。

586年から7世紀中頃には大同江と普通江に囲まれる所に平壤城を建設し、平壤城が高句麗の首都になる。こうして平壤は政治、軍事、経済という3つの機能が発揮できる城体系を構成するようになった。城体系では個々の城がそれぞれの特徴と機能を持っていた。ここで、平壤に見る3つの城、大城山城、安鶴宮、平壤城について考察を試みよう。

2-1. 大城山城: 3~5世紀に渡って建てた高句麗時代の山城である。大城山城は国内城に対する尉那巖城のように、高句麗の平壤城に対する山城とも考えられている。大城山城は六つの峰を稜線に沿った城壁でつないだ山城で、城壁には20箇所余りの城門に跡が発見されている。城門の跡のうち南門跡は門楼が5間×2間(17.15

m×6.3m)であることが調査によって明らかにされ、1978年に重層、寄棟の建物として復元されている。また城壁の内側には建物跡や高句麗時代の瓦などが発見されている。朝鮮建設建材大学の博士論文「平壤市中心領域の形成理論とその輝かしい具現」(pp122、1987年)によると、総長が9,284mでできた大城山城は6つの峰と2つの広く深い谷があるなど地勢が険しく、外敵の攻撃を防ぐ絶好な地理的位置に建てられていたと述べている。なお、山城には170個の池があって城内に駐屯している兵士達に十分な水源を確保することができたと述べ、大城山城は高句麗首都平壤の軍事的防衛の重要な拠点となったと指摘している。



1.5.1-1. 평강 지역지형도 및 안학궁성 위치도

図1 平壤 大城山城と安鶴宮城の位置関係図(

2-2. 安鶴宮城: 王が日常的に居住したとされる安鶴宮は、5世紀初期に高句麗が首都を国内城から平壤に移転することによって建設された。安鶴宮は平壤市の東北方、大城山城の南にある城壁に囲まれた一辺622m、全長は約2,488m、面積は38万平方メートルに達している方形の宮殿であった(図2)。若干菱形の平面を持つ宮城は軸対称式で平面と空間配置を施しており、自然地形を充分に考慮

しながら部分的に自由な配置手法を取り入れたのである。これは朝鮮高句麗時期の宮殿計画の高い水準を表している。朝鮮の某大学の准博士論文によると、安鶴宮は、高句麗封建国家が首都を平壤に移転する時建設した王宮として、当時東方の大国であった高句麗の国力と氣勢を見せる巨大な規模で建設されたのである。安鶴宮は辺の長さが622mにもなる四角形の城壁に囲まれ、その南側城壁には3つの門、北側と東側、西側の城壁にはそれぞれ1つの門が設けられていた。城壁は土と石で頑丈に建設され、その高さは8m以上もある。四隅には角楼が置かれていた跡がみられる。城内は正門からつづく南北の中心軸に沿って中宮、南宮、北宮が並び、北宮の東西にはさらに東・西宮があり、大きく5つの区画に分かれている。建物跡は全部で52に及び(総面積31,458㎡)、それらの建物を結ぶ回廊、石敷きの道路、池や築山を設けた庭園の跡なども発見されているとなっている。

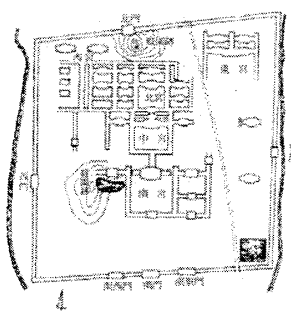


図2 安鶴宮跡配置図

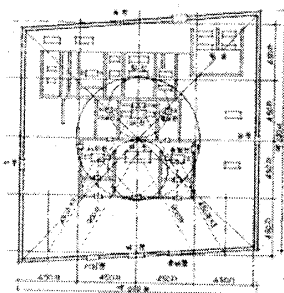


図3 安鶴宮の空間形成分析図

南宮の中心となる建物は安鶴宮の中で最も大きな建物で、11間×4間(49m×16, 3m)あり、9間×2間の見舎の四面に庇をめぐらせた平面となっているとされている。また東西にも7間×4間の大きな建物があり、南宮から中宮へは梁間3間の広い回廊で繋がっている。南宮は安鶴宮の最も中心となる部分であり、公式の大きな行事などが行われる際に用いられた正殿と考えられる。南宮の北につづく中宮の中心建物も南宮の中心建物に準ずる7間×5間(33m×18m)の大規模な建築で、この建物を中心に中宮は日常的な政治を行った場所とみられる。この南宮から中宮の一角がこの宮殿の中心的な施設と考えられ、これらの建物を結ぶ回廊も複廊となっている。一方、北宮は北に庭園の跡と思われる築山などがあり、王が日常生活を行った寝殿と考えられる²⁾。この他、東宮は皇太子のための宮殿、西宮は臣下のための施設ないしは宗教的な施設と見られている。このように、計画的な構成手法によって建てられた安鶴宮は、高句麗宮殿建築の発展を反映している。安鶴宮の構成特徴をまとめると、①一定な係数体系を適用することによって城と城内の宮殿建築群を一定な空間秩序に合わせて規則的に配置しており、当時封建王の統治観念を表す象徴的構成方法が具現化された。古代アジアの一部国(中国、日本、朝鮮など)で広域に流行された宇宙観念は、天は円形で、地は正方形だと認識されたのである。その時から人々は地を「四面八方」と言うことになった。王は自分自身が天下の全てを統治する王になったと認識し、円形の天と長方形の地を象徴できる宮殿を構想したのである。安鶴宮の建設領域では16個

の450尺×450尺の正方形を持っており、16は8の倍数であり、4の平方数にもある。これは王の「四面八方」を統治したい念願を象徴したものであると考えられる。このような係数体系は、古代の城を規則的に建てるための係数体系としていち早く使われており、都市空間形成や建築空間形成において記念性を象徴する方法としてもよく使われてきたものである(図3)。②空間形成は中心軸を中心に軸線対称式で構成されたのである。③建物は大小の南北軸線に沿って配置しており、一定の規則的な空間形成になっていた。④宮城には、池や築山を設けた庭園が沢山あり、人工的な空間環境と自然環境との調和を図ったことが読み取れる。

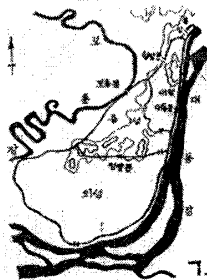


図4 高句麗時期の平壤城

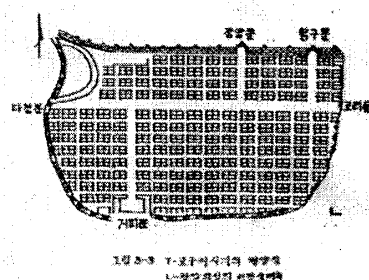


図5 平壤外城の条坊形配置図

2-3. 平壤城：現在の平壤に置かれた平壤城は、平原王28年(586)に遷都された高句麗最後の都である³⁾。東・西・南を大同江と普通江に囲まれ、北には山が迫った要害の地で、ここに都城全体を囲む総延長23kmに及ぶ城壁を築いて都としたのである。城は地形の変化に従って不整形に築かれており、内部は城壁によって北城、内城、中城、外城の四つの部分に分かれている。四つの部分は、それぞれ内城は王宮、中城は官衛などの施設、外城には一般の人々が住み、北城は三国時代前半の都城にみられた山城にあたるもので戦乱などに備えた城であったと考えられている。城壁には外部へ通じる城門、内部の各地域を結ぶ城門などいくつかの城門が確認されている(図4)。平壤城に関してもう一つ重要なのは、都市を基盤の目のように区切る条坊の跡が認められることである(図5)。この平壤城には『三国遺事』の記事によれば、最盛期には21万戸余りの人々が住んでいたという⁴⁾。このように、都城は、三国時代後半になると、都城全体を羅城で囲むこと、条坊を都市に行うなど中国風の都市計画の方法が取り入れられるようになる。その一方で、都城の形態は地形に応じた不整形であり、万々に備えた山城を都城内に設けるなどそれ以前の都城の形態も同時に保っている。中国の都城の制をそのまま写したといえる日本の平城京や平安京などの場合とは異なり、それまで朝鮮半島で培ってきた都城の形態を基本にしながらか国風の都市計画の手法を取り入れたものとみられる。

注：

- 1) 朝鮮建築大学博士論文『平壤市中心領域の形跡理論とその具現』(1987年)
 - 2) 『朝鮮半島の建築』(中西 章著1989年8月25日pp45)
 - 3) 平壤城への遷都は586年に行われたが、これらの城壁に関する調査から城壁の内城と北城が566年、中城と外城が569年に完成されても言われているが、本稿で朝鮮建築大学博士論文『平壤市中心領域の形跡理論とその具現』(1987年)や『朝鮮半島の建築』(中西 章著1989年8月25日)を参照し586年とした。
 - 4) 『朝鮮半島の建築』(中西 章著1989年8月25日pp44)による。条坊によって基盤の目のように整然と区画された城内にこれらの人々はそれぞれの家を構えて生活していたであろう。
- 図の杜典：図1, 3, 4, 5は朝鮮建築大学『平壤市中心領域の形跡理論とその具現』(1987年)。図2は『朝鮮半島の建築』(中西 章著1989年8月)による。